

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K01216

研究課題名(和文)スマートメディアユーザーのナルシズム化と新しい孤独の誕生：民族誌的研究

研究課題名(英文) Smart media narcissism and newly emerging concept of solitude: an ethnographic approach

研究代表者

池田 光穂 (Ikeda, Mitsuho)

大阪大学・COデザインセンター・名誉教授

研究者番号：40211718

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：デジタル・ネイティブである若者がスマートフォンを利用するなかで、(1)現実と仮想のソーシャル・ネットワークの動態の現状について調べ、(2)仮想コミュニケーションの増大ははたしてユーザーのナルシズム化と「新しい孤独」を生んでいるのかという疑問について答えるために、民族誌などの手法を使って、普遍的共通性と文化的多様性の特性を調査分析した。その結果、SNS依存とよばれる現代人においても情報の相互交換という意味での現実コミュニケーションの総量もまた増加しているということが、明らかになった。「新しい孤独」とは、状況的葛藤を実践的に回避するためのコミュニケーションの様式なのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究は、生まれた時からタブレットやスマホ端末と共に生活している若者たちは、Z世代あるいはi世代と呼ばれているが、彼らがインターネット環境を利用することで、それ以前の親の世代や教育関係者あるいは行政が危惧するようなナルシズム化や「新しい孤独」が、先鋭化された形では実際にはおこっていないことを明らかにした。ただしこのようなSNSなどを使ったいじめやハラスメントに対するこの世代以降の心理的抵抗力(レジリエンス)は、それ以前の世代による教育を通じた介入によって食い止められているにすぎない、ことにも留意すべきであろう。

研究成果の概要(英文)：In order to (1) examine the current dynamics of real and virtual social networks among young digital natives using smartphones, and (2) answer the question of whether the growth of virtual communication has led to narcissism and a "new type of loneliness" among users, we used ethnographic and other methods to investigate the characteristics of universal commonalities and cultural diversities. The results revealed that the subjective sense that the total amount of real communication in terms of mutual exchange of information is also increasing, even among people today who are dependent on social networking services, is ultimately putting a stop to tend to the narcissism and sense of loneliness and/or isolation of users.

研究分野：文化人類学

キーワード：インターネット スマートフォン ナルシズム化 新しい孤独 コミュニケーション 現実と仮想 S
NS ネットいじめ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始当初(申請書作成時の2019年中頃)は、デジタル・ネイティブである若者がスマートフォンを利用するなかで、現実と仮想のソーシャル・ネットワークの動態の現状について調べ、そして旧世代から危惧されているような、仮想コミュニケーションの増大はたしてユーザーのナルシズム化と「新しい孤独」を生んでいるのかという疑問について答えるために、(現実と仮想の両方の)民族誌の手法を使って、世界のいくつかの地域の共通性と多様性の特性を明らかにすることになった。

(2) このような動機を持つにいたった理由は、洋の東西を問わず、Z世代やi世代と呼ばれる若者たちの世代のスマホとSNS依存に対してその親の世代、教育関係者、ならびに行政当局は、さまざまな情報によると、若者たちに対してそのナルシズム化傾向や、ネットいじめによる自殺などの原因になる「新しい孤独」現象が生じているという危惧を抱いていることがわかった。このことをふまえ、調査を実施することにより、若者の間に流布している「ナルシズム(申請当初は「ナルシズム化」と表記、以下ナルシズム)」や「孤独」の意味とICT時代のコミュニケーションに新たな知見をもたらし、かつ危惧を抱いている旧世代の人々に若い世代との円滑なコミュニケーションの機会を提供することの一助になる[のではないのか?]というのが研究班の当初の目論見であった。

2. 研究の目的

研究開始から新型コロナウイルスの流行により調査範囲を海外より国内の状況に向けることで、研究代表者と研究分担者の研究の目的を細分化することで、各人の調査研究を支障なく遂行できるようにすることとした。

(1) 研究代表者の池田の目的は、ナルシズム化と「新しい孤独」に関する心理学ならびに精神分析からの理論についての情報収集とその分析とした。ナルシズム化と「新しい孤独」に独自の定義を与えるためである。

(2) 研究分担者の井上は、現代社会におけるスマートメディア拡散前後のナルシズムの変容について、大学生を調査対象として明らかにすることを目的とした。また井上が研究対象としているアフロキューバン宗教における、インターネットやデジタル化と不況の関係性についての研究をおこなうこととした。

(3) 研究分担者の徐は、孤独は重要な健康問題であるとして、孤独対策担当大臣を設置した英国の動向等について調査を行うこととした。公的なヘルスケアシステムの中に「社会的処方」を取り入れる取組について分析するためである。

(4) 研究分担者の山崎=スコウは、深刻化する社会的孤立に対するアプローチとして対話ロボットの独居高齢者宅での適用を図り、効果や多様な影響を評価するため調査を行うこととした。軽度認知障害(MCI)の高齢者を中心に、認知症高齢者、健常高齢者を対象に対話データを収集するとともに、高齢者のロボットとの日常的、継続的対話における適応過程で精神的安定や生活習慣の変容、家族関係の変容など多様な影響や効果について明らかにするためである。

(5) 全体での調査班の研究目的は、スマートフォン利用におけるリモート環境情報を「コミュニケーションの切断」と理解して、COVID-19の流行状況における大学の遠隔授業化を、(1)で定義する「新しい孤独」を作り出す状況だと解釈して、研究代表者と研究分担者による遠隔会議を開催して議論することとした。

3. 研究の方法

上掲の研究目的に対応する、最も適切だと思われる方法論を研究代表者や研究分担者が採用し、その研究予算を使って、研究の遂行を円滑におこなうこととした。

(1) ナルシズム化と「新しい孤独」に関する心理学ならびに精神分析からの理論についての情報収集とその分析を可能にするためには、インターネットによる情報収集、各種文献調査などが中心となる。これらの理論分析における必要な情報を提供した分野には、哲学、心理学、精神分析学、社会学、文化人類学、認知行動学などの分析枠組みにもとづいた調査をおこなう。

(2) 現代社会におけるスマートメディア拡散前後のナルシズムの変容について、大学生を調査対象として明らかにするために、インターネットを利用した情報調査会社を利用する。本研究では、研究課題採択時に研究代表者が所属する大阪大学COデザインセンターにおいて研究倫理申請をおこない、全

研究期間における承認を得ている。アフロキューバン宗教における、インターネットやデジタル化と不況の関係性については、フィールドワークならびに民族誌の手法を用いた分析を試みる。

(3) 孤独は重要な健康問題であるとして、孤独対策担当大臣を設置した英国の動向等について調査を行うためには、インターネットをつかった情報収集という手法を使った。また、コロナ禍における公的なヘルスケアシステムの中にインターネットを使った「社会的処方」を取り入れる取組について分析するために、デジタルエスノグラフィーという方法の流用の可能性についても検討した。

(4) 対話ロボットの独居高齢者宅での適用事例や、軽度認知障害(MCI)の高齢者を中心に、認知症高齢者、健常高齢者を対象に対話データを収集するために、コンピュータによるデジタルアーカイブ化の作業をおこなう必要性があった。また、ノートパソコンを使った統計分析などを利用した。

(5) COVID-19 流行状況における大学の遠隔授業化の検討については、研究代表者の池田、ならびに研究分担者の井上および徐が直接その渦中におかれたので、インターネットによる情報収集をするほかに、遠隔授業の合間に、学生たちが感じる「孤独」感や、文部科学省を含む大学管理当局の「学生への配慮」という学内措置について、各大学の職場において情報を収集し、遠隔会議において、それらの質的情報を使った言説分析などをして、意見交換をおこなった。

4. 研究成果

研究成果として、大阪大学で毎年冬におこなわれた学内研究会である豊中地区研究交流会に全員が対面のポスターならびに遠隔で参加し、研究の経過報告を共同でおこなった。また、大阪大学 CO デザインセンター招へい准教授(当時)の黒田聡にも研究協力者として研究交流会に加わってもらい、学術上の意見交換をおこなった。

(1) 研究代表者の池田、先行研究における調査時期、ネットワーク環境、通信情報の法規制、社会階層格差など世界の国別・地域別・文化民族別などの要因変数を析出し「質的研究マトリクス」ルーブリックを作成することに着手した。海外での現実フィールドワークを断念し、感染予防に注意しながら、国内の現地調査(主にインタビューを中心とした質的研究)をおこなった。その理論分析のための整理として、(a)利用者[内容分析]、(b)文化比較[多文化間比較手法]、(c)流通情報[言説分析]、(d)ナルシズム化と孤独感の様態[伏線経路(trajjectory pass)分析]において分析することが適切であることが明らかになった。池田はさらに研究分担者の井上らと共同で開始したシンギュラリティと宗教の思想的関係に関する議論を、本研究課題にどのように接続するのかについて検討をした。

(2) 井上は、日本の大学生や海外の宗教団体における信者の変容などについて案をまとめたとともに関連文献の収集、整理に従事した。より具体的には、ナルシズムの概念や定義について、心理学的先行研究を共有したとともに、現代社会におけるスマートメディア拡散前後のナルシズムの変容について、大学生あるいは宗教実践者を対象に実証的に調査する方向性を確認した。また宗教とインターネットに関する文献蒐集を日本語のみならず英語の文献についても幅広く行った。そのうち Heide A. Campbell らが執筆した Digital Religion; Understanding religious Practice in New Media Worlds という書籍の内容を確認し、欧米におけるインターネットやデジタル化と宗教の関係性について網羅的に整理することができた。また自身の課題である宗教とインターネットというテーマにそって、キューバのアフリカ系宗教の変容が、スマートフォンによってどのように変容しつつあるのか、という論文を執筆した。また、その内容を学会等で発表した。

(3) 研究分担者の徐は、学術データベースを用いて保健医療分野における孤独および孤立と健康、スマートメディアについての研究動向および実践の状況を調査した。アディクション、ついで、ソーシャルキャピタルとの関係において検討する報告が増加していたことが明らかになった。孤独は重要な健康問題であるとして、孤独対策担当大臣を設置した英国の動向等について調査を行った。公的なヘルスケアシステムの中に「社会的処方」(social prescribing, 医療機関が治療活動のひとつの選択肢として、地域の親睦クラブや自助グループなどへの参加を患者に勧奨すること)を取り入れる取組についてまとめた短報を公表した。公衆衛生・医療分野において、「孤独」「自己愛」「メディア使用」は病理として治療や対策の対象という位置づけで語られること、「孤独」対策としてフォーマルな制度・政策に落とし込む方向性(例:孤独省の設立)に着目した。以上にもとづく論文を準備する他、SNS 上の情報を研究データとして利用することについて、学会発表を行った。

(4) 山崎=スコウは、メディアユーザー研究の最新動向に関して情報収集を進め、認知症の人を対象としたロボットメディア、AI 開発の状況、そして利活用の影響や効果の文献検討を行うとともに、孤独へのアプローチとして臨床現場から対話データを収集し、実際に機械学習のアルゴリズムを用いて認知症の人の心理、行動に介入する新たな技術的可能性について検討した。近年深刻化する社会的孤立に対するアプローチとして対話ロボットの独居高齢者宅での適用を図り、効果や多様な影響を評価するため数ヵ月から1年以上に及ぶ長期実験を実施し、追跡調査を行った。

軽度認知障害 (MCI) の高齢者を中心に、認知症高齢者、健常高齢者を対象に対話データを収集するとともに、高齢者のロボットとの日常的、継続的対話における適応過程で精神的安定や生活習慣の変容、家族関係の変容など多様な影響や効果が見出された。イスラエルの人類学者を招へいた交流にも発展し、多様な文化圏における孤立や AI、ロボットとのコミュニケーションにおける相互関係や人の自己認識に関する国際的議論を深めるネットワークを築くことができた。

その他にも、病院の現場で看護師や医師を対象に手指衛生遵守を促すロボットの活用について試行を始め、各職域の専門家によるロボットへの認識と効果に関する検討を進め、ロボットに対する認識の違いや、ロボットを含むチームワークなど新たな検討課題を見出した。このことについては、池田も研究助言として関わった。また、若年者のロボットに対する認識を調査するため、学生を対象に実験を実施し、ロボットが保持する記憶、また複製可能なロボットの同一性に関して、人が持つ印象や思考の評価実験を北欧はデンマークとの比較実験として実施し、データに基づいて今後議論を深める土台を築く成果を得ることができた。さらに、高齢者の社会的孤立への対話的アプローチとして対話ロボットを活用し、独居者宅等での長期適用実験を実施した。追跡調査を通してロボットへの愛着形成や最も親しい人と同等の自己開示への意欲などを明らかにするとともに、撤去に伴う倫理的課題について検討した内容を出版した。人工物との関係性が顔見知り程度の人との関わりを希薄化させ、新たな孤独を生む可能性があるのか、その内実など今後さらに検討を要する課題が得られた。

(5) スマートフォン利用におけるリモート環境情報を「コミュニケーションの切断」と理解して、COVID-19 流行状況における大学の遠隔授業化を、もうひとつの「新しい孤独」を作り出す状況だと解釈して、共同発表「機械の「心」と対話は可能か? : 大学教育のなかでの審問」を研究発表した。

(6) 以上の研究調査活動を通して、研究班は次のような最終的見解を持つに至った;

- a) スマートメディアを使った SNS 利用など、現代では確実に仮想コミュニケーションの通信量(トラフィック)は増大している。しかしながら、
- b) 仮想コミュニケーションの通信量の増大は、スマートメディアユーザーにおける現実コミュニケーションの通信量の減少を一義的に意味するものではない。なぜなら、
- c) 現代人の多くの人たち(本研究が対象にしたのは、遠隔授業を受ける学生、アフロキューバン宗教の職能者、薬物利用者を含む健康や薬に関する情報を、インターネットを使い一人で情報収集する人たち、高齢者一般や認知症施設に入っている当事者たち、専門病院の看護職専門家、一般のロボットユーザーなど)は、現実コミュニケーションを行うと同時に仮想コミュニケーションに参入しているからである。そして、
- d) 新しい仮想コミュニケーションによる現実生活への介入は現実コミュニケーションにおけるさまざまな軌道修正を受けた「共存」状態を生み出しているものと思われる。このことは、
- e) スマートメディア依存は、一義的にユーザーのナルシズム化を引き起こすよりも、むしろ、
- f) ナルシズム傾向から脱却した別のタイプの自我意識——すなわち「新しい孤独」——がうまれつつあると考えられる。現実コミュニケーションでは共在しているにもかかわらず遠隔や SNS の集合コミュニティと乖離を感じる、「新しい(タイプの)孤独」がうまれてきたことが明らかにされた。これは現実の身体よりも仮想の心的アイデンティティが優先されるがゆえの現象である。
- g) 「新しい孤独」という現象は、コミュニケーション全体の総量だけでなく、むしろ仮想と現実の相互作用の重要性が主題化されるようになってきた結果である。すなわち「新しい孤独」とは、状況的葛藤を実践的に回避するためのコミュニケーションの様式なのである。いずれにせよ、
- h) SNS をつかったいじめやハラスメントに対する Z 世代・i 世代以降の心理的抵抗力(レジリエンス)は彼/彼女らの内的なポテンシャルに依存する可能性がある一方で、それ以前の世代ではむしろ教育を通じた介入によって食い止められていると後者の人たちは理解するという、2つの現象論がみられる。このことの見極めのためには、さらなる調査研究が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 滝 奈々子、池田 光穂、Taki Nanako、Ikeda Mitsuho、タキ ナナコ、イケダ ミツホ	4. 巻 4
2. 論文標題 音と感覚のエスノグラフィー：マヤ・ケクチの民族音楽学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Co*Design 特別号	6. 最初と最後の頁 1-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/85580	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 徐淑子	4. 巻 36(suppl.)
2. 論文標題 保健医療行動とは	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本保健医療行動科学会雑誌	6. 最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 徐淑子	4. 巻 36(1)
2. 論文標題 社会的処方 - ソーシャルワークとしての集団活動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本保健医療行動科学会雑誌	6. 最初と最後の頁 77-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Ryuji Yamazaki, Shuichi Nishio, Yuma Nagata, Yuto Satake, Maki Suzuki, Miyae Yamakawa, Manabu Ikeda, David Figueroa, Hiroshi Ishiguro	4. 巻 2021
2. 論文標題 An ethical inquiry into emotional involvement of older adults with MCI using robots: a longitudinal study	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Lancet Summit: Presymptomatic Prevention and Treatment of Neurodegenerative Diseases,	6. 最初と最後の頁 1-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yamazaki Ryuji, Nishio Shuichi, Nagata Yuma, Satake Yuto, Suzuki Maki, Yamakawa Miyae, Figueroa David, Ikeda Manabu, Ishiguro Hiroshi	4. 巻 13086
2. 論文標題 A Preliminary Study of Robotic Media Effects on Older Adults with Mild Cognitive Impairment in Solitude	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Social Robotics. ICSR 2021	6. 最初と最後の頁 453 ~ 463
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/978-3-030-90525-5_39	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Ikeda, M.	4. 巻 7
2. 論文標題 Repatriation of human remains and burial materials of Indigenous peoples: Who owns cultural heritage and dignity ?	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 C0*Design	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池田光穂	4. 巻 8
2. 論文標題 軍事的インテリジェンスの人類学の射程と倫理	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 C0*Design	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上大介, 額田有美, 池田光穂	4. 巻 1433
2. 論文標題 医療人類学からみたCOVID-19対策の現在: メキシコ、中米、パナマを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ラテンアメリカ時報	6. 最初と最後の頁 58-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池田光穂、井上大介	4. 巻 9
2. 論文標題 サイバーパンクに倫理は可能か? : 新しいネットワーク心性としてのサイバーパンクの人類学的研究序説	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 C0*Design	6. 最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/78964	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中川義信、中岡成文、西村高宏、池田光穂, 司会 : 山中浩司	4. 巻 31(2)
2. 論文標題 生きるための社会デザインを考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 9-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18918/jshms.31.2_9	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 中岡成文、西村高宏、司会 : 池田光穂	4. 巻 31(2)
2. 論文標題 哲学カフェとコミュニケーションデザイン	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 16-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18918/jshms.31.2_16	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池田光穂	4. 巻 SP3
2. 論文標題 自然学論集 : 文化人類学の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 C0*Design	6. 最初と最後の頁 1-573
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上 大介	4. 巻 44
2. 論文標題 キューバにおけるレグラ・デ・オチャ・イファ信仰の権威と正統性 グローバル化社会におけるヘゲモニーと民衆宗教	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ソシオロジカ	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上 大介	4. 巻 45
2. 論文標題 感染症と宗教 COVID-19 をめぐる動向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソシオロジカ	6. 最初と最後の頁 62-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井上 大介	4. 巻 40
2. 論文標題 ラテンアメリカ研究 地域性と学際性を架橋する経験から導かれるもの	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ラテンアメリカ研究年報	6. 最初と最後の頁 43-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 1) Ryuji Yamazaki, Shuichi Nishio, Kazue Shigenobu, Elie Maalouly, Hiroshi Ishiguro	4. 巻 none
2. 論文標題 Estimation of Dementia Severity Using SVM based on Patient 's Engagement Levels in Conversation	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proc. of the IEEE International Conference on Intelligence and Safety for Robotics	6. 最初と最後の頁 42-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Ryuji Yamazaki, Hiroko Kase, Shuichi Nishio, Hiroshi Ishiguro	4. 巻 19(s)
2. 論文標題 Robotic Media Communication for Relational Transformation: Shaping Social Dynamics in Care for Older Adults	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proc. of the 12th World Conference of Gerontechnology,	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4017/gt.2020.19.s.69889.4	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Barbara Klein, Annalies Baumeister, Kerem Turkogullari, Shuichi Nishio, Ryuji Yamazaki, Hiroshi Ishiguro	4. 巻 19(s)
2. 論文標題 Effects in Communication with a Babylike Robot	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proc. of the 12th World Conference of Gerontechnology	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4017/gt.2020.19.s.69889.5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計22件（うち招待講演 7件/うち国際学会 6件）

1. 発表者名 井上大介・池田光穂
2. 発表標題 クロノトポスとしてのラテンアメリカ：地域研究から「ラテンアメリカらしさ」のエスノグラフィーへ
3. 学会等名 第55回日本文化人類学研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 「学問の暴力」という糾弾がわれわれに向けられるとき：遺骨返還運動と日本文化人類学
3. 学会等名 第55回日本文化人類学研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田光穂・松浦博一・宮本友介
2. 発表標題 「空気と空間づくり」から考えるイノベーション・キャンパスの実現(2)
3. 学会等名 ダイキン工業株式会社・大阪大学共同「2020年度共同研究委受託研究」のフィージビリティ調査研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 分析哲学に「検閲」の文字なし：芸術と社会の係留点に関する社会学的考察
3. 学会等名 第94回日本社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田光穂、徐淑子、山崎スコウ竜二、井上大介
2. 発表標題 機械の「心」と対話は可能か？：大学教育のなかでの審問
3. 学会等名 第6回大阪大学豊中地区研究交流会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yuma Nagata, Yuto Satake, Maki Suzuki, Ryuji Yamazaki, Shuichi Nishio, Miyae Yamakawa, Hideki Kanemoto, Mamoru Hashimoto, Manabu Ikeda
2. 発表標題 The usability of humanoid robot for older people with mild cognitive impairment
3. 学会等名 Proc. of the Regional IPA/JPS Meeting Smart Aging with MATES (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 David Figueroa, Ryuji Yamazaki, Shuichi Nishio, Yuma Nagata, Yuto Satake, Miyae Yamakawa, Maki Suzuki, Manabu Ikeda, Hiroshi Ishiguro
2. 発表標題 Can older adults with mild cognitive impairment have trust in robots? Long-term trial in homes
3. 学会等名 Workshop on Trust, Acceptance and Social Cues in Human-Robot Interaction, 30th IEEE International Conference on Robot and Human Interactive Communication (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山崎竜二
2. 発表標題 メディア技術の倫理：「認知症の人によるケア」のケアの先に
3. 学会等名 日本認知症ケア学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Ryuji Yamazaki
2. 発表標題 Robotic Companionship and Ethical Viewpoints
3. 学会等名 the 8th Asian Conference Aging & Gerontology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 山崎竜二
2. 発表標題 ロボットと紡ぐ社会関係：認知症の人のケアと倫理
3. 学会等名 第3回【おうちで】大阪大学ロボットサイエンスカフェ (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 霊性と物質性の研究倫理：先住民が訴える遺骨副葬品返還運動
3. 学会等名 日本文化人類学会第54回研究大会（主催校：早稲田大学）オンライン開催
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 精神科病院の保護室という時空間について考える：大阪大学ユネスコチェア『グローバル時代の健康と教育』共催企画
3. 学会等名 日本保健医療社会学会第46回大会、大阪大学人間科学部（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中岡成文 vs. 西村高宏、司会：池田光穂
2. 発表標題 対談「哲学カフェとコミュニケーションデザイン」
3. 学会等名 日本保健医療社会学会第46回大会、大阪大学人間科学部（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中川義信・中岡成文・西村高宏・池田光穂、司会：山中浩司
2. 発表標題 シンポジウム「生きるための社会のデザインを考える」
3. 学会等名 日本保健医療社会学会第46回大会、大阪大学人間科学部（オンライン開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 先住民運動からみた日本の保守とリベラルの位相
3. 学会等名 第93回日本社会学会、会場：権力・政治（司会：中澤秀雄）オンライン開催
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池田光穂
2. 発表標題 琉球人遺骨返還運動と文化人類学者の反省
3. 学会等名 日本平和学会2020年度秋季研究大会、オンライン開催
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池田光穂、井上大介、徐淑子、山崎スコウ竜二
2. 発表標題 スマートメディアユーザーのナルシズム化は「新しい孤独」を生みつつあるのか？：先行研究の検討
3. 学会等名 大阪大学第5回豊中地区研究交流会、オンライン開催
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 徐淑子
2. 発表標題 ソーシャルワークと集団活動，孤立防止と健康支援：社会的処方をめぐる
3. 学会等名 日本保健医療行動科学会第2回オンライントーク（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ryuji Yamazaki
2. 発表標題 Responsible Care for Older Adults through Robotic Media
3. 学会等名 2020 International Conference on Medical Professionalism and Humanities, Taiwan, Dec. 2020. (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山崎スコウ竜二
2. 発表標題 メディア技術とケアリング
3. 学会等名 市民共同参画シンポジウム：IIAS「哲学と先端科学」の対話シリーズ 第2回情報科学/技術を哲学する，国際高等研究所（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ryuji Yamazaki
2. 発表標題 Robotic Media Communication and Its Ethical Challenges in Dementia Care
3. 学会等名 Online seminar at Kaohsiung Medical School (KMU), Taiwan, (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ryuji Yamazaki
2. 発表標題 Plenary panel on “Design and Democracy
3. 学会等名 The Asian Conference on Cultural Studies (ACCS) - Online, co-hosted by IAFOR and the Konrad Adenauer Foundation (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 窪田新一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 272
3. 書名 モンゴルはどこへ行く	

1. 著者名 山中 浩司、石蔵 文信、中道 正之、中山 康雄、池田 光穂、斉藤 弥生、野村 晴夫、モハーチ・ゲルゲイ、野島 那津子、平井 啓	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 242
3. 書名 病む	

1. 著者名 池田光穂、山福朱実	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 368
3. 書名 暴力の政治民族誌	

1. 著者名 松島 泰勝、山内 小夜子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 耕文社	5. 総ページ数 256
3. 書名 京大よ、還せ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

アンドロイド・ロボットの将来的活用をめざした、認知症等の早期発見システムの確立に向けた実証
<https://bit.ly/3042hra> /スマートメディアユーザーのナルシズム化と新しい孤独の誕生（科研作業ポータル）
https://navymule9.sakura.ne.jp/smart_media_solitude.html デジタル・ネイティブ族における孤独とはなにか？
https://navymule9.sakura.ne.jp/narcism_and_new_solitude.html
 機械の「心」と対話 は可能か？：大学教育のなかでの審問 https://navymule9.sakura.ne.jp/Singularity_is_not_near.html デジタル・ネイティブ族における孤独とはなにか？ https://navymule9.sakura.ne.jp/narcism_and_new_solitude.html
 情報システムセキュリティ入門 https://navymule9.sakura.ne.jp/ICT-Security_CSCD.html
 シェリー・タークルの著作研究 https://navymule9.sakura.ne.jp/Sherry_Turkle_books.html
 告白サイトにみるコミュニティとは？ https://navymule9.sakura.ne.jp/true_confession.html
 一緒にいてもスマホだぜ!!! https://navymule9.sakura.ne.jp/Alone_Together_two.html シェリー・タークル『一緒にいてもスマホ』の分析
https://navymule9.sakura.ne.jp/Reclaiming_conversation.html ガラバゴスケータイを破壊したスマートフォン
https://navymule9.sakura.ne.jp/innovationT06_CO-Design.html
 スマートフォンSNSの脅威について https://navymule9.sakura.ne.jp/threat_of_smartphones.html

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎スコウ 竜二 (Yamazaki-Skov Ryuji) (10623746)	大阪大学・先導的学際研究機構・特任講師（常勤） (14401)	
研究分担者	井上 大介 (Inoue Daiske) (20511299)	創価大学・文学部・教授 (32690)	
研究分担者	徐 淑子 (Suh Sookja) (40304430)	新潟県立看護大学・看護学部・准教授 (23101)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	黒田 聡 (Kuroda Satoshi)	大阪大学・工学研究科・招へい准教授 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------